近世語「ひやうきん」の語誌

――漢語の通俗化――

藤井涼子

一　はじめに

日本語の語彙は、漢語を外来要素としてうけいれることで、その内容を豊かなものにしてきた。漢語の影響を様々な面で和語がうける一方で、漢語が日本語の中に定着する過程において、その漢語自体の意味、用法が中国本来のものとは異なってくる場合も多い。特に近世においては、その語形、語義、表記が大きく変わり、漢語であるかどうかも見きわめがたくなる、いわゆる「漢語の通俗化」が顕著におこる。このことは近世の漢語の特色の一つとして指摘されている①。

本稿はその一例として、近世初期の仮名草子に見られ、漢語「剽軽」に発したと思われる語「ひやうきん」の語誌をたどったものである。

もっとも、この語自体が「瓢金」と書かれることが多く、語形・語義・表記とも漢語「剽軽」とは大きく異なる。したがって、まず「ひやうきん」が漢語「剽軽」に発したものであるかどうかが問われなければならないのであるが、その語誌をたどる中で、漢語「剽軽」と共通する部分、異なる部分を明らかにし、この問題について考えてゆきたいと思う。しばらくは『大漢和辞典』等の記述に従い、「ひやうきん」は漢語「剽軽」から変化したものとして考察をすすめる。

「ひやうきん」は近世初期の仮名草子類に現れるが、中でも、名所記・評判記等の実用的・娯楽的なものに用いられ、広く多くの人の目にふれ、そうした市井の一種の風俗を表す語であった。その意味で非常に近世的な語と言えよう。この語誌をたどることで、近世の漢語が日本語の語彙の中に定着する、その一つの典型を明らかに

できればと考える。

二　中国における「剽軽」

近世語「ひやうきん」を考察するに先立ち、中国における漢語「剽軽」の語義と用法を明らかにしておきたい。「剽」、「軽」それぞれの語義から見てゆく。

「剽」については、『説文』によれば「砭刺也　从刀票聲」とあり、「刀」がその意符であり、刃物や石の針で対象を刺し傷つける義をもつ。

例1　剽　匹妙切　強取又輕也（廣韻）

『廣韻』では、例1のように、「剽」の語義を「強取」と説明している。『説文』に示される語義とつながらないようであるが、対象を刺し、傷つける行為も、「強取」すなわち無理やりに奪いとる行為も、攻撃的・暴力的行為という点では通じあうものである。この攻撃性・暴力性を「剽」の第一の語義としてよいであろう。

一方、『廣韻』の説明の後半、「輕也」は「剽」が「軽」と共通した語義をもつことを示す。

例2　自全晉時、已患其剽悍　(注)師古曰、剽急也。輕也。悍、勇也。（漢書・地理志）

例2にあげた『漢書』師古注も同様に、「剽」が「軽」と共通した語義をもつことを示す。その「軽」は『説文』には「輕車也」、『集韻』には「疾也」とあり、車が軽快に進むような動きの敏捷さが「軽」の語義の一つである。「剽」がその第一の語義である攻撃性を発揮する際にこのような敏捷性をあわせもつと考えられるわけで、「剽」の第二の語義として、ここに敏捷性という点が認められる。

「軽」については、このように「剽」と共通する動きの敏捷性が語義の一つであると同時に、『廣韻』に「輕、輕重」とあるように「重」の対義語として、重量が小である義を表す。本来の語義と転義との区別はつけ難いが、ここでは動作の敏捷性を第一の語義、軽量性を第二の語義とする。

また、この軽量性が性格的な軽々しさに転じて用いられる例がある。

例3　喜則軽而翾　(注)軽謂軽佻失拠。倞小飛也。（荀子・不荀）

例3では、楊倞注にも示されるように、「軽」は性格的な軽々しさ、落ちつきのなさを表す。これを「軽」の第三の語義とする。

以上をまとめると、「剽」「軽」は次のような語義をもつ。

剽　①暴力性、攻撃性、②敏捷性

軽　①敏捷性、②軽量性、③軽薄さ

この二語の複合によって生じた「剽軽」の用例を見ると、その語義は大まかに二つに分けることができる。㈠「剽」の①義である暴力

性、攻撃性に、「剽」の②義、「軽」の①義である敏捷性が加わる場合と、㈡「剽」の①義、暴力性・攻撃性に「軽」の③義、軽薄さが加わる場合である。

前者、㈠〈攻撃性＋敏捷性〉に分類される例から見てゆく。

例4　孝景三年　呉楚反。亞父以中尉為太尉東擊呉楚。因自謂上曰、「楚兵剽軽、難與争鋒。願以梁委之、絶其糧道、乃可制。」（史記・絳侯周勃世家）

例4は楚兵の戦いぶりを表すもので、敏捷に動き、激しく攻めたてる性質を表す。

例5　漢既譎謀、禽信於陳、越楚剽軽、乃封弟交為楚王。（史記・太子公自序）

例5は楚人の気風についての例で、具体的な動作の敏捷性は表されないが、やはり、攻撃性に富み、相手を脅やかす性質を表す。そのために、楚の国を治めることは大変難しく、弟の交を領主にし、楚王にしたというのである。

つまり、中国における「剽軽」の語義の㈠とは、動作が敏捷で攻撃性に富み、相手を脅やかす性質を表すものである。

後者、㈡〈暴力性＋軽薄さ〉に分類される例には次のようなものがある。

例6　而部下多剽軽、因弄人婦女、奪人財貨帝頗知之。景宗懼乃止。（南史・列傳曹景宗）

例7　軽剽者則迸入險阻、党就羣悪。百姓虚竭、嗷然愁擾。（呉志・駱統傳）

例6は、暴力をふるい、財貨を奪いとる、乱暴者・無頼者的な性質を表す。例7の「軽剽」もほぼ同様で、険阻の地に逃げこみ、徒党を組んで悪事を働く、そのような人間を表す例である。暴力性、攻撃性という点では㈠と変わらない。又、動作の敏捷性も含まれるが、そういった自分の行動に対する思慮分別をもたぬままに暴力をふるうという、一種の軽薄さが感じられる。次の二例は特にそれが顕著な例である。

例8　天下未定、民皆剽軽、不念産殖、其生子無以相活、率皆不擧。渾所在奪其漁勞之具、課使耕桑、又兼開稲田（魏志・鄭渾傳）

例9　一曰、民多被刑、或形貌醜悪、亦是也風俗狂慢、變節易度、則爲剽輕奇怪之服故有服妖。（漢書・五行志）

例8は乱世において、人々は「不念産殖」、十分な生産活動を行わず、子供を育てようともしない。そこで、彼らの持つ漁労の道具をとりあげて、田畑を耕作させたというのである。漁労等の、多少とも攻撃性を要する仕事には携わるが、子供の養育や農耕などの堅実な努力には欠ける人間を表す。例9は五行思想の一、「貌」の大切さを説く箇所で、「風俗が乱れ、基準や法が変わる時は必ず軽々し

く奇怪な服装となる。[2]」意である。暴力性、攻撃性という面はここには見うけられないが、ここに表される、奇をてらった奇妙な服装、風潮はやはり堅実な思慮からはかけはなれたものと言ってよいだろう。

この二例から、堅実な努力や思慮、判断に欠ける人間、そのような一種の軽薄さをもった人物、風潮をも「剽軽」と言うことがわかる。「軽」の③義、性格的な軽薄さが主眼となった用法と言えよう。

例6から9には、中国における「剽軽」の語義㈡として、ともすれば、攻撃的、暴力的に相手を脅やかし、奪いとる行為にはしりかねない、しかもそれについての思慮、分別を持たない、軽薄で無頼者的な性質が見てとれる。

つまり、中国における「剽軽」、その語義㈠、㈡は攻撃性、暴力性を共通の義とし、さらに、㈠には動作の敏捷性が加わり、㈡には堅実な努力や思慮には欠けるといった軽薄さが加わるのである。

最後に、その語形については、『説文』に「剽」は「从刀票声」とあり、「軽」は「从車巠声」とある。例4『史記』司馬貞注では「剽音疋妙反、輕讀從去聲」とあり、「ヒョウケイ」と読んだことがわかる。

これ以下、中国文献に用いられた漢語「剽軽」を原漢語と仮称するが、原漢語は、語形、語義とも、日本における近世の用例とはかなり異なる。その変化の様相について、三章以降で見てゆきたい。

三　中世末、抄物に見られる「剽軽」

中国における「剽軽」の用いられ方は以上のようであったが、日本においては中世末の抄物に次のように用いられる。

例10　勧人生業　農畢乃令子弟就学、剽軽游恣者皆役以田桑。生業ハ世締方ノ事、スギハイナソヲ人ニ教タソ　農ガハツレハ学問ヲサセウト云タソ　剽軽ハウデコキダテシテ　人ヲネメキメテマワル者ソ。

（蒙求抄　七）

「ウデコキダテ」とは「腕力をことさら他に誇示しようとすること」[3]で、同じく『蒙求抄』の中で「遊俠」の説明にあてられる。ここでは「剽軽」とは、乱暴者で定職をもたずに遊び暮らすような人間を言い、原漢語の語義の㈡にあたる。

しかし、これは原漢文にあたる「剽軽」を引用し、わかりやすく説明するにすぎない。また、『史記』に用いられた「剽軽」も『史記抄』ではそのまま音読するのみである。

この時期の用例は、現在のところ、この他には見出していない。運歩色葉集等の中世古辞書類、文明本節用集以下の中世から近世初頭にかけての節用集類にも例はない。『日葡辞書』を初めとするキリシタン資料、狂言などにも用いられていない。これらから、この

語は、中世末の日本語の語彙の内に、十分に取りいれられていなかったかと推測される。

四　近世初期、仮名草子に見られる「ひやうきん」

近世初め、「ひやうきん」は仮名草子に登場する。今回調査した限りでは『難波物語』（明暦元・一六五五）二例、『東海道名所記』（万治二・一六五九）一例、『野郎虫』（寛文二以前）六例、『浮世物語』（寛文初・一六六一）五例、『江戸名所記』（寛文二・一六六二）三例の五資料が最も早いものである。野田寿雄氏の分類によれば④、仮名草子の第三期、評判記、名所記的なものにかたよって用いられるようである。

表記に関しては、次に示すように、仮名書きでは「ひやうきん」、漢字で記す場合はすべて「瓢金」と書かれる。

例11　すべて賢愚貧富をわかたず、たちいる程のやぼすけは、心空になら柴の、戀の重荷を背負ひ、身はひやうきんに、なりひさごの、浮いた軽口をたたいて、物事しみじみとしたる事なく（難波物語）

例12　さいつころまでか、遊女どもの舞けるに瓢金のとびあがりども、これに心をとらかされて（東海道名所記一）

「瓢金」は原漢語「剽軽」から考えると、表記上はあて字ということになる⑤。「瓢」は「剽」と同音異義、「金」は「軽」の唐音の表記と見られる。「剽」に「瓢」をあてた点については後でふれる。また、「軽」に「金」をあてたことには積極的な理由は見出せないのであるが、あるいは「軽」を唐音で「キン」と読むことのむずかしさ、なじみにくさを避けたものかとも考えられる。

他方、時代を下り、『合類節用集』、『書言字考節用集』には「瓢金」は見られない。両書とも「剽軽」として原漢語どおりの表記をあげている。また『書言字考節用集（人倫門）』には「慓氣者　疾也俗又作ハ瓢金非也。」ともあり、「瓢金」を俗の表記とし、それに対して「慓氣者」を正字として示している。「慓」は「剽」と同音同義であり、それに「疾也」と注をつけることは、かなり原漢語「剽軽」の語義に近いものである。この後「ひやうきん」は様々な表記で用いられるが、姿は変わっても、その語源を原漢語「剽軽」と解する意識をここに見ることができる。

このように、近世初期、仮名草子に見られる「ひやうきん」は、語形、表記ともに原漢語と異なるが、語義に関しても、やはり違いが見られる。例11、12、二例とも遊女にのぼせ、我を忘れて有頂天になる様を「ひやうきん」と言う。この点は他の15例もすべて同様である。遊女、歌舞伎、博打といった遊びに浮かれる人間、その様子を表すのが、この時期、仮名草子に見られる「ひやうきん」であ

る。これを「ひやうきん」の意味特徴の一つ、享楽性と考えるが、原漢語「剽軽」には認めにくいものである。その一方、原漢語には広く認められた、攻撃性、暴力性は日本での用例には認められない。このような違いがある。

しかし、その語義をやや細かに見ると、共通する点も又認められる。この点について次に考えてみたい。

仮名草子の「ひやうきん」には、「とびあがり」という語句と並立して用いられる例がある。

例13　一手先も見えぬとびあがりの瓢金なりければ、名をだに、人なみにはつかで瓢太郎とぞ云ひける。（浮世物語　巻一・三）

このような例が五資料の17例中3例ある。例数はさほど多くはないが、やや後の資料にも同様の例があり、『浪花聞書』には「とびあがり者、ひやうきん者なり。」ともあり、両語の結合が慣用的になり、語義の上で重なりあう部分が大きいことをうかがわせる。

『日本国語大辞典』は、この語義を「とっぴな言動をすること、また、その人、ひょうきんもの、むこうみず、はねあがり」と述べ、『近世上方語辞典』には「突飛な言動をなすこと、言動の軽兆なこと、又その人」とある。つまり、「とびあがり」とは、普通とは異なった、突出した状態であり、ひいては、常軌を逸脱した、とっぴな様を表すと言える。

この語の単独の用例を次に見る。

例14　又、角前髪の若い者同じ心のとびあがりども四人。揃へ明衣の染こみに気をつくし　筋を我物にして参りける。（西鶴織留四・三　諸国の人を見知るは伊勢）

右の例では、「角前髪」に「揃へ明衣」という人の目をひく服装で、道筋を我物顔でのし歩く人物を「とびあがり」という。その服装や言動は、やはり常軌を逸脱していると言えよう。

例15　いやしきものを謂だし、夫妻にいたせなどとは近比本意を背　たおすゝめ、お恨に存ずる。」と常とかわった挨拶すれど、両人の飛あがり共、まだ気づかず「扨は旦那はしゃれて堅い御口上。（けいせい色三味線　京之巻・一）

例15は大夫の身うけをすすめる調子のよい男を「飛あがり」と言う。遊里で浮かれ遊ぶという点から、「ひやうきん」と言いかえてもよいような例であるが、彼らの浮かれ遊ぶ様子は、世人の目から見れば常軌を逸脱したもので、それを「とびあがり」と言い表すのであろう。

例14、15から、常軌の逸脱性を「とびあがり」の語義として見てきたが、それは「ひやうきん」にも認められることである。遊里等で浮かれ遊ぶ人間、その様子は世間一般の目から見れば、常軌を逸し、「とびあがり」とも呼ぶべきものなのである。

この他に、「とびあがり」、「ひやうきん」と併用される語句に「一手先も見えぬ」、「痴者」等がある。先にあげた例13には「一手先も見えぬとびあがりの瓢金」とあるが、他にも次のような例がある。

例16　一手先も見えぬ、とびあがりども、おほくの金銀を、つゐやしても、糸瓜の皮とも思ハズ　（江戸名所記　四）

例17　瓢金の痴者ども猶又、こころをまどハし、たましゐをうばゝれ、有頂天になりてうかれつつ　（江戸名所記　五）

「一手先も見えぬ」とは、「近い将来の予測もできない。」ことであるが、「ひやうきん」「とびあがり」、両語の表す常軌逸脱性とは、裏返せば思慮分別の欠落ということでもある。何の考えもなく、目前のことに浮かれ遊び、奇をてらった服装でのし歩く。いきおい、「とびあがり」、「ひやうきん」が「一手先も見えぬ」と軽視され、「痴者」と酷評されることになるのである。

このような、常軌逸脱性、思慮分別の欠落とは、性格的な軽々しさによるもので、「ひやうきん」の意味特徴の一として、軽薄性という面がここに認められる。

また、これは原漢語「剽軽」の語義の㈢にも通じるものである。漢籍の例9「剽軽奇怪之服」は、まさにその服装が常軌を逸したものであることを表す。例8「皆剽軽、不念産殖、其生死無以相活」も、生産や子孫という将来に対する思慮を欠くことを表す。日本で仮名草子に用いられる「ひやうきん」は原漢語のように、暴力を働く無頼者とまでは言えないが、無頼者であれ、遊び人であれ、世間一般から見れば常軌を逸し、思慮に欠ける点、それが軽薄性に起因することにおいては、原漢語「剽軽」と多分に共通するのである。

以上、近世初期の仮名草子に見られる「ひやうきん」の語義は次のように説明できる。

遊女や歌舞伎といった遊びに浮かれる様子、また、そのような人物を表す。その言動は常軌を逸し、思慮分別を欠いた軽薄なものであると同時に、ただ目前のことに浮かれるという享楽的なものである。

そして、この軽薄性という面については原漢語「剽輕」の語義から受けついだものである可能性が多分にある。一方、遊里等で浮かれ遊ぶという享楽性は原漢語には認めにくく、日本独自の意味特徴かと推測する。なぜ、このような意味変化が生じたのか、次章では、その変化の過程を考えてみたい。

五　「剽軽」から「ひやうきん」へ
――意味変化の過程――

原漢語「剽軽」が日本語の語彙に定着して本来の意義を保ち、残

しつつも、新しく、遊里等で遊び浮かれる享楽的な性情や様態を表すようになる、その意味変化について、いくつかの可能性を考えてみたい。

五―一　「ひようたん」からの連想

例16　今はむかし、浮世坊とて、浮きに浮いて瓢金なる法師ありけり。

（浮世物語　巻一・二）

例17　思ひ置きは腹の病、当座〳〵にやらして、月、雪、花、紅葉にうちむかひ、歌をうたひ酒のみ、浮きに浮いてなぐさみ手前のすりきりも苦にならず、沈みいらぬこころだての、水に流るる瓢簞のごとくなる。これを浮世と名づくるなり。

（浮世物語　巻一・一）

例16、17は『浮世物語』の冒頭である。例16の「浮きに浮いて」とは、穎原退蔵氏の「『うきよ』名義考」[6]にも述べられるとおり、まならぬ世であるから当座々々を楽しめばよいという近世特有の享楽的な処世態度を示す表現である。例17の「沈みいらぬ心だても同様で、「どんな場合にもがっくりこない」[7]陽気で気楽な状態を表すが、ここでは「水に流るる瓢簞」がこのような浮かれた状態、享楽的な処世態度にたとえられる点に注目すべきである。前田金五郎氏によると[8]、川流れの瓢簞が浮かれた状態、処世態度、軽口の比喩に用いられることは多く、近世の慣用的な表現とされる。次の例18、19もそうである。

例18　たゝうき世の波にたゝよふ、一瓢のうきにうひたる世の中の、人の心はよしあしの難波入江のもしほ草、かきあつむるといへども、みしかきをひきのはし、其心さしばかりありがほなり。

（一休諸国物語　序）

例19　いかなる瓢簞の川流れなる軽口も少しはしぶりこぶり給ふべしと思ひしに

（一休ばなし　巻二・一）

例18「うきにうひたる」は「水に浮く」と「心がうきうきする」の掛詞である。『尤之双紙』「浮かぶもの、品々」にもあるように、浮かぶものと言えば水に瓢簞という関係から瓢簞がうきうきとした状態、処世態度を表し、更に、その軽さから例19のように軽口をも表すのである。

ここから考えられることは、このような表現が慣用化するうちに、語形の類似から「ひやうきん」と「ひようたん」の間に連想関係が働き、「瓢簞」に代わって「ひやうきん」がうきうきとした状態、処世態度を表すに至ったのではないかということである。

例20　色河原の野郎遊びに模様かゆる思案せし時色友達の松原の闇の夜といふ跡先しらぬ瓢簞の川流れ、浮に浮く男が源をすすめて

（けいせい色三味線　京之巻一）

例20の「跡先しらぬ」は「瓢箪の前後が同じ大きさであること」と「事の前後を顧ないこと」の掛詞、「浮にうく」は例18と同じく「水に浮く」と「心がうき〳〵する」の掛詞で前後を顧みず無分別に浮かれる男、「ひやうきん者」としてもよいような男を表す例である。このような表現から、やがて「ひやうきん」が「瓢箪」に代わり、先の例16「浮きにういて瓢金なる法師」のような表現が成されるのである。

例21　すべて賢愚貧富をわかたず、たちいる程のやぼすけは、心空になら柴の、戀の重荷を背負ひ、身はひようきんになりひさごの浮いた軽口をたたいて　（難波物語）

右例の「身はひようきんになりひさご」とは『江戸名所記』にもあり、[9]慣用的なものかとも考える。「ひやうきん」と「瓢箪」この二語は先に見たように、語形の類似による一種の縁語関係にあったが、それが定着した結果、語形の類似からの連想ということを離れて、単に意味的なつながりだけで、「ひやうきん」と「ひさご」が同一の文脈で用いられるのである。

以上、近世初期の仮名草子に見られる「ひやうきん」が享楽的な性情や容態を表すようになる、その意味変化の起因の一つが、「瓢箪」との語形の類似による連想ではないか、このように考えてきた。

表記に関しても、原漢語から見て、瓢金はあて字であるが、「剽」に「瓢」をあてることにはこういった連想も働いているかと考える。

五―二　「瓢」、「漂」

第二に、「剽」と同音異義の関係にある「瓢」、「漂」の影響を考えてみたい。

『書言字考節用集』には「剽輕」の俗の表記として「瓢金」があげられている。

「瓢」は『集韻』に「匹妙切。音剽」、『玉篇』に「旋風也」とあり、風が吹く様子、又「瓢泊」に示されるように、あてもなくさすらう様を表す。「漂」は『説文』に「浮也」とあり、水上をただよう様を表す。つまり、「瓢」と「漂」の二字は風に吹かれるのと水に浮くのとの相違はあるものの、共にあてもなくただよう様を表すのである。

この二字を、特に遊里をふらふらとめぐりさまよう義で用いることがある。次の二例がそうである。

例22　少年、倡妓にたらされて瓢客（うてんつ）となる。（根無草　後編二之巻）

例23　漂客所楽（ヒョウカクダイシン）也。（瓢金窟）

「瓢客」、「漂客」は単なる旅人の意でも用いるが、ここでは遊里の客であることは明らかである。

このような用法は日本独自のものではなく明の時代の書、『類書

纂要』にもあり、それが更に、次例に示すように『俚言集覧』にとられている。

例24　飄客　娼妓買をいふ

〔類書纂要〕飄客言下人軽二身于花柳之中一、如中物之飄流而無上定也。

（増補　俚言集覧）

「剽客、漂客」を遊里の客として理解し、使用していたことは明らかである。このような例と、「ひやうきん」が遊里等で遊び浮かれる様を表す例と、双方の前後関係については断定できず調査が必要であるが、『類書纂要』の記載がすでに広く知られたものであるとするならば、原漢語「剽軽」が日本において意味変化する際に、「剽」と同音の「飄、漂」からの連想が働いたことも考えうる一つの可能性である。

六　「ひやうきん」の流行と定着

本章では、おおよそ十七世紀半ばから十八世紀半ばまでの間に、漢語「ひやうきん」がどのように用いられて定着してきたのかを見ることにする。

仮名草子類の「瓢金」と比較して大きな違いとなるのは、「瓢簞」「なりひさご」「浮きに浮ひたる」等の語句と共に用いられる例が見られないことである。

例25　さるひやうきんなるわかきもの有。明くれゆうらくにくらし、あきなひのうりかいハしらず、しよくは手につかず

（宇喜蔵主　古今噺揃　五）

例25は、「ひやうきん」が語義の上ではこれまでと変わらずに遊び浮かれる様、享楽性を表すが、「剽簞」「浮く」等の語句を伴わずに用いられている。ただし、この咄本『宇喜蔵主古今噺揃』の序には、「何れのときにかありけん、瓢簞寺の住侶宇喜蔵主と申せしは一生浮世は飛鳥川、きのふの分別もけふは人のあたなり。」とあり、「瓢簞」が浮かれた生き方や態度の比喩となる表現はすたれたわけではない。「ひやうきん」がこれらの語句を伴わずに、つまり瓢簞からの連想をぬきにしても、遊び浮かれる様を表す語として理解されるようになってきたと見るべきである。

以下、一、浮世草子・洒落本類と、二、咄本類とに分けて、「ひやうきん」の意味用法の変化を見てゆく。

六―一　浮世草子・洒落本に見られる「ひやうきん」

十八世紀半ばまでの浮世草子・洒落本に用いられる「ひやうきん」について見ると、次の例26などはその典型であるが、「我を忘れて遊里で浮かれ遊ぶ」という、その享楽性においては変わることがない。

例26　室は西国第一の湊、遊女も昔にまさりて、風儀もさのみ大阪にかはらずといふ。浮世の事はしまうた屋の金佐衛門を誘引て、同じこころの瓢金玉、ぬけ舟をいそがせ、

（好色一代男　五　欲の世の中に是は又）

また、「ひやうきん」の語義のもう一つの意味特徴であり、「とびあがり」とも共通する「軽薄性」は、やはりこの時期の用例にも顕著である。

例27　鈍かに重い金平を、転倒し平金と、名乗る男の楽しみは、三味線、小歌に如くはなし。

（ぬれほとけ　序）

例27は金平浄瑠璃の主人公、金平をひっくりかえして「平金」と名乗る伊達者の例で、番町辺の旗本奴がモデルと言われる。[10] とっぴを好み、粋を競い、周囲に威をふるう、享楽性と共に軽薄性の強く表された例である。

仮名草子類と若干異なる点は、表す対象に女性が含まれてくることである。

例28　されば女は氏無うて、玉の輿なきにしもあらねば（中略）年長けては生半の悴世帯は嫌な兆になり、ただ剽軽となり果てて、寄る辺定めぬ浮舟と波に漂ふもかず〳〵侍り。

（都風俗鑑二　娘を仕立てる手入付り奉公の品）

右の例28は、浮かれた定まらぬ生き方を示し享楽性という点ではこれまでの用例と変わらないが、女性について用いられる例はこれまでに見られないものである。「ひやうきん」の表現対象が次第に拡大していると言えよう。

だが、それ以上に注目される現象は、十八世紀半ば、近世を前後に二分する時期に「瓢金」、「剽軽」を書名に冠した洒落本が刊行されたことであろう。『瓢金窟』（延享四・一七四七）、『剽軽雑病論』（明和年間・一七六七～七二）である。

前者は『遊仙窟』のもじりで、大阪、瓢箪町の細見を兼ねた漢文の案内記である。瓢箪町の地名の由来は、水に浮かんだ瓢箪が風に吹かれて漂う様子に遊客をたとえたものと言い、この書名については「瓢取二一郭之名一、金窟借二諸妓之胯一畔一云」という説明がされる。

後者は『傷寒雑病論』のもじりで、放蕩病、酒客病など、浮かれ遊ぶ様を病にたとえ、勘当湯、黄金湯など、それに対する薬方と効能を述べたものである。その序に「余俠族素多。銭不レ餘二二百一。放蕩未二十一稔一。為二店替一。三十有二。瓢一輕十居二其質一。常為二町内厄介一。於レ是撰二用嘘八一百巻一。作二瓢一輕雑病論一」とあり、これが『傷寒雑病論』の序、「余宗族素多向餘二百建寧紀年以来猶未十稔其死亡者三分有二傷寒十居其七」をもじったものであることは明らかである。

『瓢金窟』はまさに遊里の案内書であり、この「瓢金」は遊里において浮かれ遊ぶ享楽性を表すと見てよい。一方の『剽軽雑病論』における「剽軽」は浮かれ遊んで放蕩のかぎりをつくす享楽性と同時に、「侠族」と呼ばれるやや気負った者の前後を顧みない軽薄性を表す。ともに、近世初期の仮名草子における「ひやうきん」の語義と大きく変わるものではない。

しかし、その用いられ方はまたこれまでにないものである。『瓢金窟』では、「瓢」は「瓢箪町」の一字をとり、「金窟」は「諸妓之胯畔」のことだという、本来の語構成を無視した、こじつけとも言える説明を行っている。『剽軽雑病論』では、『傷寒論』の「傷寒十居其七」のもじりに利用される。先に例27で示した、「金平」を逆転させて「平金」とするのも同様であるが、語形の類似、語構成を利用して遊戯的に言語を用いた例であり、近世の言葉の特色を強く示すものである。

また、このように漢籍をもじった洒落本はこの時期に多く見られるが、いずれも、これまで文学、学問の世界においてその権威を支え尊ばれてきた漢籍の書名、内容を漢文でもじり、しかも実際の内容はその多くが遊里に関する通俗的なものであるという、内容と形式の不一致を笑いの材料とする、近世特有のものである。[11] そして、これらの作品名にこの語が用いられたということは、後にも述べるが、「ひやうきん」が滑稽の意を獲得する過程として注目すべきものであり、同時に、時代の特徴を強く示す、いわば流行語の様相を帯びたものであったと言えよう。

六―二　咄本に見られる「ひやうきん」

本節では、前節で見た浮世草子、洒落本とほぼ同時期の咄本において「ひやうきん」がどのように用いられてきたのかを見てゆく。

咄本とは、「一般に小咄と呼ぶ短い笑話を集めたもの」で、「形式・表現には時期的、地域的にかなり相違がある。[12]」とされるが、本節で考察の対象とし、また「ひやうきん」の用例を見出すことができたのは、咄本の第二期にあたるもので、その語義に関しては、その享楽性、軽薄性が変わらずに認められる。

六章の初めにあげた例25では、芝居に夢中で、仕事に身が入らず、ついには役者になる男を「ひようきんなるわかきもの」と言い、次の例29のような、軽薄、無頼の男も「へうきんなるもの」と言われる。

例29　あるへうきんなるもの、日暮になると門立して往来の女房にわるくちをいひ、ぞめきける。　（当世口まね笑・五）

しかし、これらの享楽性、軽薄性に加えて、咄本における「ひやうきん」には、軽口上手とでも言うような、口達者な性格を表す一面

がある。たとえば、次の例30にあげる「ぎやうにひやうきん」な僧は、「浮蔵主」と言われるほどの享楽的な僧であるが、談義に当世詞を用いたことをとがめられ、小僧が言うので叱ったが、つい自分にもうつったのだと言いわけをする。そこから逆に自分の身持の悪さを暴露するのであるが、当意即妙の軽口をたたいて窮地をきりぬけようとする、口の達者な一面が認められる。

例30　或寺の住持、ぎやうにひやうきんにて有しが、去年十夜の談義に、弥陀御本願のおもハくはしよわけの立た事。神ぞ余経にかやうの事はみえぬといはれければ、談義はてゝ或旦那いふやう御まへの談義にハ、当世詞が出て人がわらひまするとと異見しければ（中略）昨夜の談義に当世詞を申たとておわらひ被成たと承ました。小僧共が申を折檻いたしたを覚ず申ました。平生我等が身持も詞のごとく、俗衆にもまじハるかとおほしめさうがめいわくにござる。愚僧において不義な事共ハ、此寺へすハりてから、みぢんけがごあんせぬといはれた。

（軽口大わらひ・五）

このような性格を軽口上手として、「ひやうきん」の意味特徴の一つに数えたい。これは原漢語「剽軽」の語義には見あたらず、日本語として用いられるなかで生じたものと推測されるが、突然ここに現れたものではなく、近世初期の仮名草子、『浮世物語』の浮世坊に認められる性格でもあった。それはまた、五章で述べたように、「川流れの瓢箪」がその軽さから一方では享楽的な人生態度の比喩として、また一方では軽口の比喩として用いられたこともきっかけとなったのであろう。

十八世紀半ばになると、洒落本『瓢金窟』『剽軽雑病論』の刊行とほぼ同時期にあたるが、咄本においても、『軽口ひやう金房』（元録末）、『軽口ひやう金苗』（延宝四・一七四七）、『軽口俵金袋』（明和八・一七七一）等、「ひやうきん」を書名にしたものが次々と刊行され、「ひやうきん」と「軽口」との結びつきがより強いものになったと見られる。

これらの咄本は笑話を集めたもので、軽口をたたきうまく相手を言いくるめるにせよ、逆に自分の失敗を暴露するにせよ、多くは笑いのうちに話のおちがつく。そうするうちに、軽口、――相手を言い負かすような詭弁の類[13]――と限定せずとも、単にその言葉が滑稽で笑いを誘う場合、またさらには言葉だけでなく、身ぶりや行動のおどけた様子も「ひやうきん」の表す意味内容に含まれてくるようである。

例31　ひやうきんなる息子あり。親仁、夜歩きを折檻すれどもさらに用ゐず。殊に盆には猶出けるが、ある時、女出立をして夜明くるまで踊り、くたびれて部屋に入り、かの出立のままにて打

ち転ぎて寝たり。（中略）詮索する声に目をさまし、大きなる声にて、「松坂こえてやつさ」といひさま背戸へにげた。

（当世手打笑　五）

例31は盆踊りに浮かれる息子の話で、仕事もせずに遊びくらす点はこれまでの「ひやうきん」が享楽性を表す用例と変わらないのであるが、女出立で唱ってにげだすおどけた様があわせて描かれている。

つまり、「ひやうきん」の表す人間の属性に享楽性、軽薄性という面があり、咄本においては軽口上手という面が加わり、更に、広く言動の滑稽性を表すように変わってゆくと見られる。例31はその一つの現れと言えよう。

六―三　滑稽性を表す「ひやうきん」への変化

前節では、「ひやうきん」が享楽性、軽薄性という面から広く言動の滑稽性を表すように変化してゆく、その語義変化の初期の様相を近世前期の咄本に見た。また、前々節では洒落本においてもその変化を可能にする状況を認めたのであるが、その後どのように変化進展するのか、残された問題点を述べる形で考えてみたい。

変化をとげたと判断される確かな例は、十八世紀後半、近世後期に入ってから見出される。

例32　ひやうきんにするなと姉に縛付けうかれこそすれ〳〵（柳多留八）

例33　にもちのおやぢとんだひやうきん者にて。いろ〳〵わる身おどりをかしく。ちや屋の家内のものもみな〳〵大わらひをする。

（江之島土産　二）

例34　名代のひやうきん者と呼ばれしかみさま、浮世風呂とは一ツながら屋と見えて、湯くみ場の片わきなる、ひらき戸を明て、ゆかたのなりにて出来り

（浮世風呂　三下）

例35　年中笑つて世を渡る滑稽（ひやうきん）仲間の三人連、持つたが病の遊び日和、気の養生が遊山にか

（箱根草　初上）

例32は幼児のおどけた様子、例33はおどけた身ぶりで人を笑わせる老人、例34は洒落を好み、人を笑わせてばかりいる女性に対して用いられる。いずれも、広く言動のおどけた様を表し、現代語における使われ方とほとんど変わらない。また、例35では、「滑稽」を「ひやうきん」と読ませる点にこの語の理解のされ方は明らかである。

以上の四例は、作者、版元が江戸であり、大きくとらえれば江戸語の状況を示すと見てよい。しかし、このような変化が進む過程においては東西で語義の対立があり、東ではその変化が遅れていたかと考えさせる資料がある。

例36　軽率に騒がしきことを東国にてひやうきんと云、西国にては

おどけたる事をひやうきんと云　（物類称呼　五）

右の例36がそうであるが、東国では軽薄性がまさり、西国においては滑稽性への変化が生じていたことを示すのであろうか。たしかに、『ぬれほとけ』、『剽軽雑病論』など、作者が江戸の人間と考えられる資料に軽薄性は顕著である。また、後の随筆『綺語文草』では「江戸にては俠者をひやうきん者といふ」とその語源を説く。また、十八世紀後半の上方の辞書『譬喩尽』では、「摽軽いふ　昔詞也今軽口ヲ云　但転甲口、座興口等トハ別也。」と解説する。「ひやうきん」が既に「軽口」の昔詞となっていたかどうかはともかくとして、上方ではこれを「軽口」の意味で用いていたことは明らかである。

しかし、以上の点から、東では「ひやうきん」が軽薄性を表し、西では滑稽性を表すという『物類称呼』の記載内容を肯定するには材料不足であろう。今後の課題の一つとして、同時期の東西の用例をそろえ、比較することが必要である。

七　おわりに

以上、近世語「ひやうきん」の語誌をたどってみた。

漢語「剽軽」が日本語の語彙の中にとりこまれるにあたって、その語形、語義、表記を大きく変え、近世語「ひやうきん」となる。その変化の内容を見ると、地口や洒落にも通じる言語の遊戯的な側面を利用して、近世特有の享楽的な様態を表すという意味特徴を獲得する。更に洒落本や咄本の書名にも用いられ、一種の流行語の様相を呈する。まさに、時代と深く関わりながら漢語が通俗化を果たす一例と言えよう。

今回の調査は、資料、時代とも、限られた部分を見るのみで残されたところは多い。その空白を埋めると同時に、これまで見てきたこの語の特徴が、一つの近世における漢語受け入れの型として、他の語にも認められることなのかどうか、今後の課題としたい。

注

① 鈴木丹士郎「近世語彙の概説」『講座日本語の語彙5近世の語彙』明治書院
② 小竹武夫『漢書』筑摩書房
③ 『時代別国語大辞典室町篇』三省堂
④ 『日本古典全書　假名草子集上』朝日新聞社　解説
⑤ 佐藤亨「仮名草子の漢字」『漢字講座7近世の漢字とことば』明治書院
⑥ 穎原退蔵「『うきよ』名義考――浮世草子に関する一考察」『穎原退蔵著作集　第十七巻』中央公論社　所収
⑦ 『日本古典文学全集37　仮名草子集　浮世草子集』一五〇頁
⑧ 前田金五郎「『浮世物語』雑考」『國語國文』34巻6号
⑨ 此道にたち入ほどのしれものハ、心そらになら柴の　恋の重荷を背負ひ、身はへうきんに鳴瓢のうきにういた軽口をたゝきて（吉原）

⑩『日本思想大系　近世色道論』岩波書店　解説
⑪　麻生磯次『江戸文學と中国文學』三省堂　三二四～三三五頁
⑫『国語学研究事典』明治書院「咄本」の項
⑬　岡本隆雄「一休系咄本覚え書」『北海道駒沢大学研究紀要6』

資料とした文献は次のとおりである。

『説文』（欽定四庫全書所収）、『廣韻』（同上）、『集韻』（同上）、『漢書』（評点本　中華書局）、『旬子』（『新釈漢文大系』明治書院）『南史』（評点本　中華書局）『呉志』（同上）、中田祝夫編『蒙求抄』（勉誠社）『難波物語』（『日本古典全書　假名草子集上』朝日新聞社）、『浮世物語』（『日本古典文学大系　仮名草子集』岩波書店、『東海道名所記』（『東洋文庫　東海道名所記』）、『江戸名所記』（『仮名草子集成　第七巻』東京堂出版）、『野郎虫』（『新編稀書複製会叢書　第二十七巻』臨川書店）、中田祝夫編『古辞書大系　合類節用集　研究並びに索引』（勉誠社）、中田祝夫、小林祥次郎著『書言字考節用集　研究並びに索引』（風間書房）、『西鶴織留』（『定本西鶴全集七』中央公論社）、『好色一代男』（『同上一』）、『けいせい色三味線』（『新日本古典文学大系　けいせい色三味線　けいせい伝受紙子　世間娘気質』）、『一休諸国物語』（『咄本大系三』東京堂出版）、『一休ばなし』（同上）、『根無草』（『日本古典文学大系　風来山人集』）、『俚言集覧集成第七巻』大空社）、『宇喜蔵主古今咄揃』（『咄本大系五』東京堂出版）、『軽口大わらひ』（同上）、『当世口まね笑ひ』（同上）、『ぬれほとけ』（『日本思想大系　近世色道論』岩波書店）、『都風俗鑑』（『新日本古典文学大系　仮名草子集』）、『瓢金窟』（『洒落本大成一』中央公論社）『剽軽雑病論』（『古典文庫134　初期洒落本集』）、『傷寒論』（『傷寒論集成』出版科学総合研究所）、『当世手打笑』（『近世笑話集上　元録期軽口本集』岩波文庫）、『柳多留八』岩波文庫、『浮世風呂』（『日本古典文学大系　浮世風呂』）、『江之島土産』（『古典文庫451　十返舎一九集三』）、『箱根草』（『帝国文庫　滑稽名作集下』）、『綺語文草』（『浪速叢書11　稿本随筆集』浪速双書刊行会）、『物類称呼』（『諸国方言物類称呼』京都大学文学部国語国文学研究室編）、『譬喩尽』（『たとへづくし―譬喩尽』同朋社）